

去る2008年9月中旬の1週間、本年1月に締結された韓国国立中央博物館との日韓学術文化交流協定に基づき、韓半島の著名な青銅器時代の遺跡である松菊里（ソングンリ）遺跡の発掘調査に参加する機会を得た。ここで、その際に見聞きしたことを書き記しておきたい。

9月17日、宮崎空港からの直行定期便にて仁川国際空港へ。自身、訪韓は3度目なのだが、宮崎から直接、韓国入りするのは初めてである。約1時間半のフライト中、意思疎通など、諸々の不安が頭をよぎる。

龍山駅経由で韓国国立中央博物館へ。緊張して汗だくになりながら、金誠亀学芸研究室長や考古部の方々にあいさつ。

9月18日、ソウル南部バスターミナルより9:50発の高速バスで扶餘へ。本日のみ国立中央博物館の李ジン(手へんに珍のつくり)曁学芸研究士に同行していただく。14:00に遺跡着。今回参加する松菊里遺跡の調査(第12次調査)は、韓国伝統文化研究所が主体となる学術調査。まず、主任の鄭治泳専任研究員より遺跡の概要について説明していただく。鄭さんは日本語の知識があり、大いに救われる。とともに、当方もまずは日常会話程度の韓国語ができなければ、と痛感。

松菊里遺跡は、1974年以来、国立中央博物館や国立公州博物館、同扶餘博物館などによって調査が実施され、韓国の初期農耕文化を究明する上で重要な役割を果たしてきた遺跡である。現在、全体で100万㎡に及ぶ史跡整備計画があり、堅穴復元や資料館再編などが予定されているとのこと。今回の第12次調査区は国立中央博物館などによる「53～57調査区」の範囲内にあり、枝状に分かれた丘陵の基部近くにあたる。水田が営まれる周辺の低地との比高差は20m程で、どこもなく佐賀県の吉野ヶ里遺跡周辺の雰囲気似ている。実際に指導に来られた先生方の口からも、度々「吉野ヶ里」の単語が発せられていた。

遺跡の南にある現在の資料館(展示館)は、小さいながらもガイダンスセンターとしての機能を備えている。松菊里式と呼ばれる土器や平面三角形を呈する石包丁といった集落出土資料とともに、遼寧式銅剣や小形の磨製石剣、玉類など、石棺墓からの出土遺物も目を引く。松菊里式は、精製の赤彩土器を若干量含むが、大多数を占める無文の甕や壺は変化に乏しく、口縁部の外反が目立つ程度である。粗製の土器を見ることの好きな自分だが、特徴を捉えることは難しそうだ。ならば、遺跡での出土状況や遺構のあり方は、何か手がかりを与えてくれるのだろうか？

ということで、以下、その2で。(吉本 記)



遺跡全景



遺跡資料館